



朝鮮の民話
金剛山の
虎退治

松谷みよ子・瀬川拓男
梶山俊夫・絵

太平出版社

913.6	まつ	たに み よ こ せ が わ た く お
	松	谷みよ子・瀬川拓男 再話 金剛山の虎退治 朝鮮の民話 3 太 平 出 版 社 1972 P 182 22cm ￥ 680

松谷みよ子 まつぎ 1926年東京に生まれる。『びわの実学校』同人。子どもの文化研究所の民話の研究会に所属。『龍の子太郎』で国際アンデルセン賞、『ちいさいモモちゃん』で野間児童文芸賞を受賞。

瀬川 拓男 たがお 1929年東京に生まれる。劇団 太郎座を主宰。民話による歌劇・人形劇の脚本を数多く書く。モスクワ国際映画祭審査員、パリの国際青少年映画センター日本代表。おもな著書に『秋田の民話』『小説力太郎』など。

梶山 俊夫 かにやま 1935年東京に生まれる。1963年に渡欧。帰国後、全国の奈良時代廃寺跡・国分寺跡を歩く。多くの新羅系古瓦を発見しながら絵本作家の道にはいる。朝鮮李朝の民画「洞庭秋月」を最初の友とする。

金剛山の虎退治

朝鮮の民話 3

母と子の図書室 56—6

1972年 9月25日 第1刷発行

￥ 680

著 者	松 谷 みよ子
	瀬 川 拓 男
発 行 者	崔 容 徳

発行所 東京都千代田区西神田1-2-15 石合ビル

株式会社 太 平 出 版 社 ©

TEL 291-9744・9752 294-7083 振替東京99563

落丁・乱丁本はおとりかえいたします

道野整版・加藤印刷



朝鮮の民話
金剛山の
虎退治

松谷みよ子・瀬川拓男
梶山俊夫・絵

太平出版社

母と子の図書室



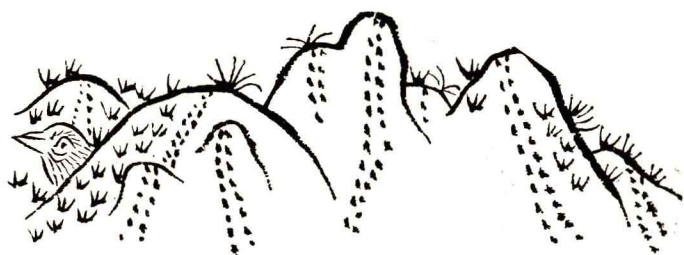
太平出版社

原书空白

原书空白



朝鮮の民話
ムガンサン
金剛山の
と虎退治
松みよ子・瀬川拓男
梶山俊夫・絵
講談社出版



朝鮮と日本は

むかしむかしからとなりどうしで

ながよくとたりけんかをしたり

いろいろのことがあつたけれど

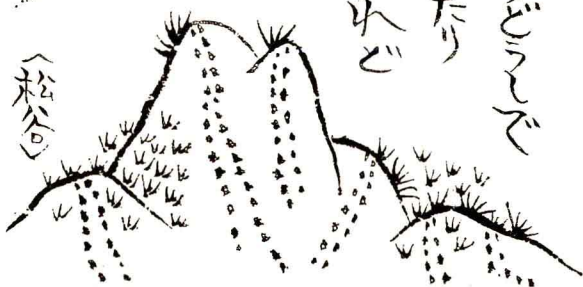
やっぱりいちばん近い

おとなりのくにです

そのくにのひとびとの

喜びや悲しみをも

いっしょによみまします



（松谷）

朝鮮の民話 三 もくじ

金剛山の

フンブとイルブ

※12※

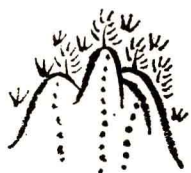
虎退治

に氷の木の新言ひ

※33※

悪魔の仇討ち

※53※



山人夢とり

※47※

鉄を食う化けもの

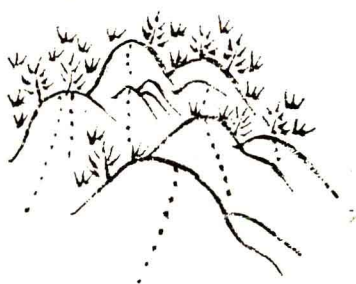
※69※

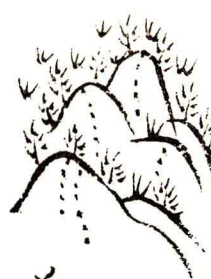
末世の怪物

※75※

欲ばり長者

※83※



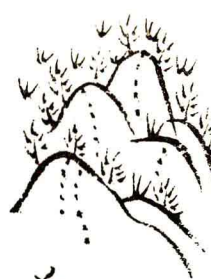


山を運んだ丸みきの龍

※99※

楽浪の太鼓とラッパ

※105※

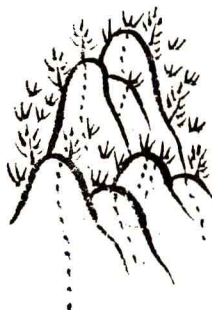


鳥追いの歌

※119※

乞食か仙人か

※13※



虎は死んでも

※14※

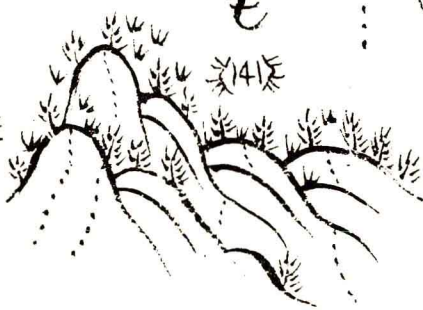


金剛山の虎退治

※149※

朝鮮の民話の
リアリズム

あとがきに代えて



※173※

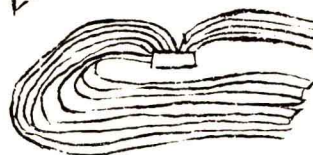


室書園の子と母

朝鮮の民話 3

クムカンサン
金剛山の
虎退治

松谷みよ子、瀬川拓男、再話
梶山俊夫、絵



フシグとイルブ



むかし。あるところに、それほど金持でもないし、それほど貧乏でもない百姓がおった。

百姓にはふたりのむすこがいて、兄をノルブといい、弟をフンプといった。ふたりが大きなり、それぞれ嫁さん^{よめ}をもらったころ、父親はあの世へいった。

すると、兄のノルブは三日めのおとむらいがすむかすまないうちに、

「この家はきょうからおれのものだ。すぐにでていってくれ。」

と、いった。フンプがこまって、

「でていけといっても、どこへでていくんだ。」

というど、

「やぶのかげの小屋をおまえにやるよ。そこでくらすがいい。」

と、いった。そこでフンプは、泣く泣くおとむらいの笠^{かさ}をかぶり、おとむらいの着物をきたまま、嫁さんといっしょに家をでた。

やぶのかげの小屋は、小屋というときこえはいいが、ひどいものだった。きびがらを壁^かにたて、きびの葉っぱを屋根にしたもので、風がふけばふつとびそうなるものだった。フンプはその小屋で嫁さんとくらしした。そのうちに子どもがぞろぞろ生まれたが、ほかにいくところもないし、金もないから、その小さな小屋をガサゴソいわせて、ごちやごちや

にくらした。フンブなんぞはすみっこにおしつけられ、夜なかに足をのばすと、きびがらの壁をつきやぶって二本の足がにゅつとつきでるしまつだった。

あけがた、通りかかった百姓が、

「やいフンブ、足をひっこめろ！」

といってポンとたたくと、小屋の中から、

「おう、ああーっ。」

と、でかいあくびがきこえ、足がひっこむ。ま、こんなくらしだった。

家を追いだすくらいだから、兄のノルブは、田も畑もほんのぼちりしかくれなかった。それでは自分の口はおろか、子どもなんぞやしなえたものでない。しかたがないので、フンブはあちらこちらやとわれていって、その日その日をくらししたが、それだとして、水のような粟あわのかゆを流しこむのがせいぜいだった。

ところがある日のこと、フンブがとぼとぼと村の道を歩いてみると、よびとめる者があった。どこかの金持のじいさまらしい。

「じつはわしのせがれが、ちつとばかり酒を飲みすぎて、ちつとばかりろくでもないことをしてな、ここの役所にふんじばられた。あすは笞打むちうちちの刑けいというのを受ける。『百た

き』といってな、なんと、百もたたかれるのじゃ！ あの色がれはからだがよわくての、親でさえ手をあげたこともないのに、百もたたかれたら死んでしまうわい。そこで、ものは相談じゃが、役所では身がわりの者でもいいというておる。おまえさん、身がわりになつてはくれまいか。お礼はたんまりするで。」

フンブはこれをきくと、天にも昇るほどうれしくなった。お礼はたんまり！ そうなりや、子どもたちにもちつとは濃いおかゆを食わせてやれる。いや、米のかゆだつて食わせてやれる。

フンブは老人に、喜んで身がわりになります、といった。そして、つぎの日の朝、役所であう約束やくそくをした。

ところが、フンブは運がなかった。つぎの朝、いそいそと役所へいってみると、老人はひよひよとしたむすこを連れてでてくるところだった。

「無罪むざいほうめん放免ほうめんとなつたよ。」

老人は大口をあけて笑うと、フンブにすまなかつたともいわず、さっさといてしまつた。どうやら、たくさんの金を積んで、むすこを無罪にしたようなあんばいであつた。

フンブはあつけにとられてあとをみおくつていたが、きゆうにからだじゆうの力もぬ